

第8挿話ライストリュゴネス族「あらずじ」

午

後1時。オコンル通り沿いにある、グレイ
ム・レモン菓子店の目の前で、ブルームは
YMCAの若者から「ビラ(throwaway)」を受け

取る。ディロン競売場の前にいる、「デッダラスの娘」
(スティーヴンの妹ディリー)を見ながら、カトリックの
多産によって生じる貧困と、その一方で、信徒からの布施
で贅沢な暮らしをする神父たちのことを考える。オコンル
橋(右写真)にやって来ると、岸壁を行き来する橋の下の
鷗たちに先ほどもらった「エリヤは来たらん(Elijah is
coming)」と書かれた「ビラ」を投げる(threw down)が、鷗
には見向きもされない。そこで、露店で売られていた「バ
ンベリー菓子(Banbury cakes)」を投げると、鷗たちはそれを抜け目なく食べつくす。川を眺めながらブ
ルームは「つねに流れている流水、絶えざる変移、それをわれわれは生の流れの中でたどる。だって人
生は一つの流れだ」と考える(U-Y 8.265)。

底荷事務所の報時球で「一時過ぎ」であることを確認してから、ウェストモアランド通りを渡り、モ
リーがルーディを懐妊したばかりの約12年前の幸福な日々を思い出し(「幸せ。あの頃のほうが幸せ
だった。……ミリーを鹽湯に入れてやる夜。アメリカの石鹼を買ったんだ」)、「生の流れ」を実感す
る。すると、元恋人のグリーン夫人から話しかけられ、彼女の夫のもとに届いた奇妙な葉書(「U・
P」)を見せられ、また、ピュアフォイ夫人の陣痛が3日続いていることを聞く。トリニティ大学を左手
に歩きながら、パーネルやグリフィスなどの政治家について想いを巡らせていると、パーネルの実兄を
見かけて「偶然の一致」と考える。そして、つい先ほどまで考えていたA・E(ジョージ・ラッセル)
が若い女性と一緒に、自転車に乗ってブルームのそばを通り過ぎ、彼は二度目の「偶然の一致」に驚く。

グラフトン通りの賑わいに「五感がそそられた」ブルームは、左折してデューク通りに入り、バート
ン・レストランの扉を開ける。しかし、そこにいる客たちの獣のようながつがつした食べ方に辟易
し、「ここじゃとても食えたもんじゃない」(U-Y 8.289)と考える。来た道を少し戻り、同じくデューク
通りにある「謹厳なるパブ」、デイヴィー・バーンに入る。「おせせ鼻フリン(Nosey Flynn)」に話しか
けられながら、ブルームはゴルゴンゾラのチーズ・サンドイッチとバーガンディを注文する。その赤ワ
インはブルームの「全身の血を滾らせ」、彼は石楠花が乱れ咲くハウスの丘でモリーと抱き合い、キス
をした記憶が鮮明に蘇り、今の自分との差を改めて痛感する。ブルームが手洗いに行っている間、店主
のバーンとフリンは彼の職業やフリーメイソンについての噂話をし、そこに加わったレナードとライア
ンズ、ロッチフォードはこの日行われる金杯の話をする(後にわかるが、この競馬レースで勝つのは
大穴の「モイラナイン(Throwaway)」(U-Y 5.150/12.558)である)。

店を出たブルームは、「国立図書館でキルケニー民報を調べ」るべく、ドースン通りに向かう。その
途中で生若い盲人が通りを渡るのを助け、罪の輪廻について考えていると、キルデア通りでボイランの
「麦藁帽」「黄褐色の靴」「折返しのズボン」を目にする。彼に会いたくないブルームは、とっさに
図書館の隣に併設されている博物館へと行先を変更し、激しい心臓の動悸を感じつつ、ポケットの中の
物をあたふたと探すふりをしてなんとか彼は博物館の門の前に辿り着き、「ほっ！」と息をつく。



(写真) 1900年頃に撮られたオコンル橋
(National Library of Ireland on The Commons)